（別紙4）　　令和　5　年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	4271401426		
法人名	有限会社　気楽		
事業所名	グループホーム　ポテトの丘		
所在地	雲仙市愛野町乙3501番地3		
自己評価作成日	令和5 年7月24 日	評価結果市町村受理日	令和5年10月3日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/42/index.php

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	特定非営利活動法人　ローカルネット日本評価支援機構
所在地	長崎県島原市南柏野町3118-1
訪問調査日	令和5年9月16日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

気持ち穏やかに過ごして頂けるように心がけている。 家族様が此処に入所させて良かったと思ってくださるように努める。 色々な認知症の症状を理解しながら支援していく。 看取りをする上で人間として誇りを持ち自分らしく又家族様の気持ちを汲み取りながら最終を迎えて頂くように努める。 地域の方が何時でも相談しやすい雰囲気を作りしていく。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

職員自身が入居者となった際にどのようなケアをしてもらいたいかといった視点でホームの理念をつくり、「気持ち穏やかに楽しく過ごしましょう」と玄関に掲げ、職員や来訪者に周知を図っている。周辺にはジャガイモ畑が広がり、海が一望できる場所に位置する当ホームは、家庭的な環境のもとで、職員が入居者に温かくそして優しく寄り添った支援に努めている。敷地内には家庭菜園や手作りのベンチを置き、入居者がゆっくりと外気浴を愉しむことができる。ホームは「利用者がその人らしい最期を迎えられるように支援する」とうたい、入居者本人及び家族の意向を尊重した看取りの体制を構築しており、開設以降20件の支援実績があることは評価できる。今回のアンケート調査では全ての家族がサービスに大変満足しているとの結果であり、家族との信頼関係を構築していることが窺える。地域の方がいつでも相談や訪問しやすい雰囲気作りを大切にしており、日頃から地域と顔の見える関係づくりを行っているホームである。

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる （参考項目：23,24,25）		1. ほぼ全ての利用者の
		○	2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある （参考項目：18,38）	○	1. 毎日ある
			2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている （参考項目：38）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている （参考項目：36,37）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている （参考項目：49）		1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
		○	3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている （参考項目：30,31）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている （参考項目：28）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている （参考項目：9,10,19）	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている （参考項目：2,20）		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度
		○	3. たまに
			4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている （参考項目：4）		1. 大いに増えている
		○	2. 少しずつ増えている
			3. あまり増えていない
			4. 全くいない
66	職員は、活き活きと働けている （参考項目：11,12）	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 職員の2/3くらいが
			3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果

ユニット名

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は頭の中にあるが実践に繋がっているか分からない。 心がけながらケアに活かしているが日常は忘れかけているのが現状である。 ミーティング等、話し合いをしてケアに繋がっている事もある。	玄関入り口に理念を掲げており、訪れる人の目に入る。「気持ち穏やかに楽しく過ごしましょう」の理念を実践するため、職員自身が認知症になった場合にどのような対応をしてほしいかを意識しながら支援に努めている。管理者は入居者本位の支援を行っているかをミーティングなど通じて話し合い確認している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会には加入しているが日常的には交流が難しい。 清掃活動等には参加している。	地域の話し合いや行事にはホームから管理者等が参加している。小中学校の職場体験やボランティア体験の受け入れも行っている。地域住民より季節の野菜等の差し入れや老人会会長との交流もあり、顔の見える関係づくりができている。管理者は、今後、独居の方の集う場（オレンジカフェのような集まり）などの開催をホームで定期的に行えないかと考えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方からの相談には対応している。 運営推進会議や地域会合では発信している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今までは年6回の会議を行っていたがコロナ禍で、文章の開催にしている。 今年度はホームでの開催を予定している。	運営推進会議は7地区の自治会長、老人会会長、民生委員や市の職員のメンバーで構成され、ホームの状況を説明し意見交換を行っている。コロナ禍においては、書面にて、活動報告、入居者状況、事故報告・ヒヤリハット、身体拘束の報告を行い、意見を頂くために意見書と返信用封筒を送付している。今年度は対面で会議を開催できるように検討している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	何かあれば市担当者に連絡を取り、出向くようにしている。 協力関係は築けているように思える。	運営推進推進会議のメンバーとして市の職員へ会議への参加依頼や、市地域包括支援センターの職員に介護保険制度の話を依頼するなど日頃より連絡を取り協力体制を整えている。また、生活保護受給者に対して、市生活保護課の職員の訪問や連絡を取り合い、入居者本人の状況を伝えている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束はしないケアに取り組みつつ、1番は入居者の安全と体調の事を考え、やむを得ない場合もある。 利用者の混乱を少なくする為に玄関その他の出入口に施錠をしている所もある。	入居者の安全面を優先事項と捉え、ベッド上から滑落しないようにベッド2点柵と壁面で囲んでいる入居者が数名いる。家族にも説明し同意を得ると共に行政や運営推進会議に定期的に身体拘束を行っていることを報告している。管理者は職員とのミーティングの中で代替方法等を協議しているが、ベッドからの転落転倒事故を考慮すると難しいとの声が上がっている。	あらためて身体拘束は原則禁止であることを職員全体で共通認識し、身体拘束を必要としない状態の実現を目指すために職員間で検討を重ね、その経緯が分かるよう具体的に記録に残すことが望まれる。また、職員が身体拘束に関する研修会に参加した際には、講師へ代替案を尋ねるなどし、常に代替的な方法を考え身体拘束は極めて限定的にすることをホーム全体で共有し、引き続き職員全体で議論し、身体拘束をしないケアに向けて取り組むことが望まれる。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	虐待・身体拘束の研修に参加している。 ミーティング時等に情報を共有し防止に努めている。 時々それはグレーゾーンに当てはまるのではないかと思われる時は、その都度話し合いをしている。 緊張感が薄れてきて、言葉に優しさがかけている時もある。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前は成年後見制度を利用された方が数名おられ、ホーム内で研修したことがある。 研修があれば参加している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	説明を行い理解・納得をされたうえで入居して頂いている。 改定がある時は文章を送り、承諾を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	要望を聞いているが、言われない事が多い。プランの見直しをする時は要望を聞き、スタッフ間で話し合い共有しながらケアに活かせるようにしている。	管理者は家族が面会に訪れた際や、介護計画の見直し時に必ず家族へ意見や要望を聞くようにしている。特に重度化や終末期となった場合は、密に家族と連絡を取り合いながら本人の状態を報告し、、家族の意見や要望を聞き、支援に反映させている。毎月、家族に対し写真付きの便りを発送し、入居者の様子を伝えている。	重要事項説明書において第三者（外部）評価の受審状況がわかるよう、第三者（外部）評価実施の有無、第三者（外部）評価実施日、評価機関名、評価結果の開示状況を記載すると共に、外部評価受審の際は家族アンケートを実施して客観的に家族意見を汲み取る機会となる旨説明することを期待する。

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	常に意見や提案を話せる雰囲気があり反映されている。 働きやすい環境を整えている。	年に1回、代表者と面談を行い、職員の要望やストレスチェックなどを行っている。職員の多くが勤続10年以上であり、職員意見や提案が言える職場環境で、代表者や管理者側も意見や要望にすぐ応えられるようにしている。家族の声からも、入居者はもちろん、職員も共にストレスのない事業所を目指していることが窺える。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	一人一人に合わせ働きやすい環境を整えるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	必要な研修等、提案し参加させている。 研修等何時でも行ける体制をとっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者との交流はコロナ禍で中止されているが、管理者がリモート会議に参加し大事な事は報告している。 雲仙市・島原半島のリモート研修にはスタッフも参加している。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	コミュニケーションを取りながら信頼関係を築き安心して頂けるように努めている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族との話し合いをする中から情報を得ている。 家族やその他関係者からの情報が不足がちな時がある。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	情報の中から何を必要としているかを見極め対応に努めている。 本人を観察し家族との意見を含め内容を考え今のサービスがあっているか、その都度相談している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	反応が少ない方には一方的な場面もあるが声掛けを欠かさず関係を築いている。 気兼ねなく話ができ落ち着いて暮らせるように、入居者の気持ちになり考えるように心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日常の状態・様子・気持ち等を伝えるようにしている。 家族と利用者さんの関係を考え、家族を立てられるように配慮しながら話をするように心がけている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で面会は積極的にできていなかったが感染対策を行い時間を決め面会をして頂いていた。本人の大事に思っていた人や場所について会話をする様に努めている。	ホームは新型コロナウイルスの感染対策を行いながら、家族との面会ができるように配慮している。入居者の帰宅願望を踏まえ、その方の不安を緩和して、「帰りたい」という気持ちに寄り添いながら本人の体調のタイミングを見て家族と協力して短時間の帰宅を検討するなど、本人本位に取り組んでいる。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士で楽しく過ごされる時もあれば、混乱やケガに繋がったりする場合もあるので、出来る限り良い関係を取りもつように努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	終了後も訪ねて来られる方もおり関係性を大切にしている。相談があった場合は対応している。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	（9）	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	会話の中で個々の思いを汲み取りながら情報を共有し、出来るだけ気持ちに添ったケアが出来るように努めている。困難な場合は相手の立場になり検討している。	ホームは入居者のこれまでの生活習慣を理解し、入居者が自分らしく生活したい思いを介護理念にあげ、職員が会話や行動の中でできるだけ入居者の思いを汲み取るよう意識した支援を行っている。職員は、入居者と家族の会話の中でもヒントを得ながらその方の希望や意向の把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	生活歴が把握できていないのが現状で、家族もあまり把握されてい無い方が多い。情報収集した事はスタッフ間で共有している。生活歴が分からない方も多い。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人々の心身状態をスタッフ間で共有し又表情や行動を見て本人が、どうしたいかを考え気持ちよく過ごせるように努めている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族に要望を聞き現状の課題を話し合い、又自分の思いを伝える事が出来ない人は本人本位になるように作成するようにしている。	入居者毎の職員担当制で、家族に要望等を聞き、介護計画を4か月ごとに見直しを行っている。計画作成担当者や管理者も日常的に介護現場に入り、職員と共にモニタリングを行い、介護計画に反映している。介護計画で立案した支援内容は、入居者一人ひとりに合った具体的内容を記載し、目標達成に対し評価しやすいものとなっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を記録に残し情報を共有して介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	変化に応じて話し合い柔軟な支援に取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源を支援することは出来ていないが、季節を感じるドライブ等は企画している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	定期的に往診して頂いており体調の変化がある時は相談をし指示を仰いでいる。かかりつけ医との関係は良い。	2週間に1回、ホームの協力医が訪問診療を行っている。ホームでの看取りに対しても理解があり、緊急時を含む24時間の協力体制ができている。受診した際の記録は家族にも送付し、報告を行っている。職員は日報などで薬の内容や受診の記録などを記入し、職員間で共有している。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	気づいたことは看護師に伝え、直ぐに対応してもらっている。看護師との連携がとれている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時は連携室や家族と連絡を取りあいながら早期に退院できるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	話し合いを積み重ねていくことで良い関係を作り、スタッフは家族の気持ちを汲み取りながら取り組んでいる。今後も看取りを受け入れる施設として学びつつ支援できるチームでありたい。	重要事項説明書に入居者が重度化した場合の指針を詳細に記載している。管理者が指針を入居時に家族へ説明し、本人及び家族の意向を確認・同意を得ている。職員は看取りの支援が不安なく行えるよう終末期の研修や体制を整備を行い、看取りを経験した職員や家族からも感謝されている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的に訓練を行っているが急変時に対応出来るか不安であるが、繰り返し行うことで忘れていた事等を復習し身につけられるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている	消防署との訓練は年1回実施又自主避難訓練を定期的に行っており、注意点・反省点等を話し合い全員が身につくようにしている。火災等おこさないように心掛けている。	ホームには自家発電機を設置しており停電などに備えている。避難訓練は夜間想定も含め消防署立会いのもと定期的に実施している。地域の消防団と顔馴染みの関係を作ったり、地元自治会の消防訓練に参加するなど地域との協力体制を築いている。外部講師を招きBCP策定に向けた研修を予定している。	管理者はホームが地域の避難所になることも視野に入れており、備蓄品のリスト化と共に更に数量などを充実させることを期待する。また、非常時持ち出しファイルには入居者の状態が分かる写真を添付するなどし、BCPの策定を含め更なる災害対策を強化する取り組みに期待したい。

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人に合わせた言葉かけをするように心がけている。方言が笑顔につながる方にはあえて使っている。虐待につながる言葉がけにならないように努めている。	職員間で、入居者一人ひとりに対する声かけや対応方法を考え、どのような声かけ・対応をしたら本人が落ち着くのか、笑顔になられるかなどを職員間で情報共有しながら支援している。職員は自分自身が認知症になった際にどのような支援してもらいたいかを意識し、日々の支援に生かすよう心がけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人がどのように思っているか感じ取り自己決定が出来るように努めている。希望に沿うように心掛けているが希望に答えられない事もある。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人一人の思いや状態にに合わせて過ごしてもらっている。出来るだけ本人の意思に合わせて支援出来るように心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	一般的な身だしなみは心がけている。散髪は定期的におこなっている。季節に合わない服を着る方は、その時に応じて対応している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	誕生日は好きな物・季節の行事には、その食事を提供し四季折々の食材を取り入れ気季節感を味わってもらつている。個々の食事形態に合わせている。軽い手作業は手伝ってもらっている。	入居時に入居者や家族へ嗜好調査を行っている。食事は職員による手作りのものを提供している。ホームの敷地には家庭菜園があり、また、春にはかまどを使用してタケノコを茹でるなど、旬の食材を多く用いて季節感のある食事を提供するよう取り組んでいる。食事は職員も一緒に食卓を囲みながら、毎月、行事食や郷土料理を取り入れたメニューで食事を楽しめるよう支援している。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人一人に合わせた食事量・食べやすい形態にしている。食べる量が確保出来ない方は補助食で補ったりしている。一日の水分量が確保出来るように心がけている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後一人一人に合わせ口腔ケアをしている。自分で出来る方は声掛けをしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	立位が出来ない方も、日中は出来るだけトイレでの排泄をしている。個人のパターンを把握し声掛け・誘導し、失敗が無いように支援している。	排泄チェック表にて、入居者一人ひとりの排泄パターンを把握し、日中はできるだけトイレで排泄できるよう支援している。尿意がない方も時間を見て職員が声かけし、トイレへ誘導している。夜間帯に使用しているポータブルトイレは毎日掃除し、定期的に洗浄、消毒を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便の把握には常日頃から心がけている。便秘の人には飲み物や食事等で工夫しているが、それでも難しい方は薬で調整している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日はだいたい決めているが、本人の体調や気持ちを大事にして入浴してもらうようにしており、湯の温度等はそれぞれの好みに合わせてゆっくりと入ってもらっている。嫌いな方は気持ち良く入ってもらうような声掛けを心がけている。	3日に1回は入浴できるように支援している。機械浴を導入し、重度化した入居者も湯船に浸かることができ、また、職員の介護の負担軽減に繋がっている。入浴ができない場合は、清拭、陰部洗浄、手浴、足浴などを行い、寝たきりになっても清潔保持ができるよう支援すると共に褥瘡防止に繋げている。柚子湯や菖蒲湯など季節を感じてもらえる工夫も行っている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人一人に合わせた明るさ・温度・布団の調節をしている。夜間安心して眠れるように雨戸を閉める方もいる。昼間は状態に応じてリビングのベットで休む方もいる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬時には薬表を見て数・名前・顔を確認し服薬してもらっている。誤薬が無いように気をつけている。目的・副作用までは理解しているか分からないが、直ぐに調べられるようにファイルに閉じている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人のやりたい事を聞くようにしているが何をしたいのか分からないが現状である。時には散歩や買い物に出たりする時もあるが、ゆったりと何時もと同じ時間を過ごすのが混乱に繋がらず良いのではと思うこともある。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日常的に外出をすることは難しいが、花見や秋のドライブ等計画し季節を感じ楽しんでもらっている。庭に出て気分転換をしている。	好天時にはホームの庭やテラスで海を眺めながらお茶の時間を設けている。入居者が重度化し、以前のように頻回に外出することができなくなったが、秋には弁当を作り、ドライブに行くことを計画している。以前は芋ほりやいちご狩りなどに出掛けたり、入居者の希望で墓参りや他県までに出掛けることもあった。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を持っていることで混乱に繋がるので家族の了解を得て所持しないようにしている。財布の中にお金を持っていないと不安になるので、おもちゃの小銭を持っている方もいる。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	贈り物や手紙が届いた時・本人の希望がある時は電話をしている。落ち着きが無い方には家族に電話したり、スタッフが代わりになって話をすることもある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	温度や明るさ等は遮光カーテン等も利用し状態に合わせ調整している。花や飾り物で季節を感じたり、心地よく過ごせるようにしている。コロナ禍の為、こまめな換気を心がけている。	玄関や居間、廊下の壁には、職員による手作りのベンチ、家族や入居者の作品や季節の花が飾られ、家庭的で温かな雰囲気が感じられる。共有空間にベッドが配置され、寝たきりになっても皆と同じ空間で過ごすことができるよう配慮している。居間や食堂は天井が高く、開放的で明るい雰囲気である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	それぞれに座りなれた椅子や場所があるので、落ち着いて過ごせる場所に居てもらえるように心がけている。自分が思った場所を見つけ、過ごしている方もいる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族との写真や手紙を張り、思い出してもらうように工夫している。あまり荷物が多すぎても混乱に繋がる方もいる。状態に応じ心地よく過ごせるように、物の配置を工夫している。	居室の掃除は週に4回職員が行っている。入居時に、入居者本人が使用していたタンスや愛用品など、使い慣れたものの持ち込みが可能であることを家族に伝えている。居室の壁には、本人の写真や家族の写真などを飾りその人らしい居室づくりができている。入居者一人ひとりの状態に合わせて、居心地よく過ごせるように家具の配置などを工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	出来ることは見守りをして、安全な生活が送れるように工夫している。居室から共用スペース・トイレ等、入居者が通る場所は危ない所が無いか気がけている。出来ることをしてもらっていても混乱に繋がる時もある。		